（様式第８号）

事業報告書（平成　30　年度）

事業名　防災ワークショップで地域力 UP!!

団体名　OKAZEN　　担当者名　山田　真珠

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

１．活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

ワークショップ名：防災ワークショップで地域力 UP !!

日時：２月２３日（土）　１３時～１７時

場所：京山公民館

参加人数：６人

概要

①災害(さいがい)や防災(ぼうさい)ってなんだろう？災害にはどんな種類があるだろうか？

②グループワーク

テーマ１　災害に対してどんな備えができるかな？

テーマ２　防災ポスターをつくろう！

③考えた防災ポスターを地域の人に紹介する

内容

１．災害(さいがい)や防災(ぼうさい)ってなんだろう？災害にはどんな種類があるだろうか？

下記のスライドを用いて、自然災害には地震、津波、土砂崩れなど様々な種類があり、対応の仕方も変わることを紹介する。

（様式第８号）

２．グループワーク

テーマ１　災害に対してどんな備えができるかな？

いつ来るか分からない災害に対してどんな備えができるのかをグループで話し合う。はじめに以下３つの事例を紹介した。

（１）学校給食

学校給食で防災食を提供。岡山県内の学校でも提供されたことがある。

岡山県立東備支援学校の給食（1/17）

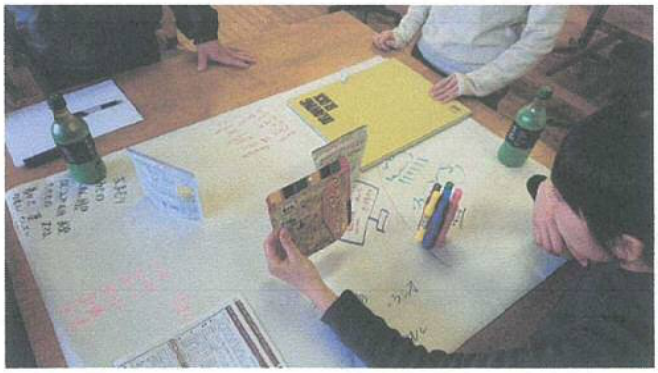
（２）防災リュック

様々な防災リュックが販売されていることやリュックの中身について紹介。

（３）防災訓練

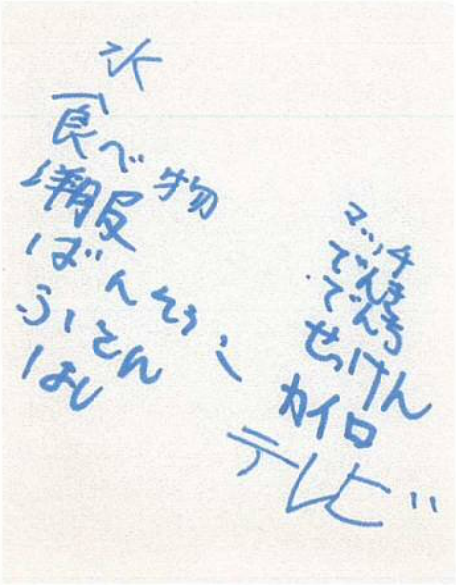
（４）防災食

防災食というと「おいしくない」というイメージを持つ人が多いが、近年では様々な企業で多種多様な防災食が考案され、販売されていることを紹介。中には、お湯だけでなく、水でも防災食を作れるものもある。

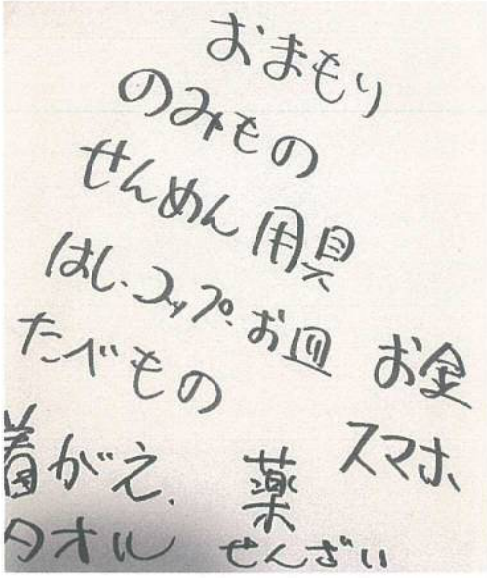


以上のことを踏まえて、「災害に対してどんな備え（物）ができるかな？」について話し合いを行った。参加者からは、水・食べ物・服などの生活する上で欠かせないと思うものが多く挙がった。その他にもお守りなどの自身にとって大切なものを考えた人もいた。

（様式第８号）



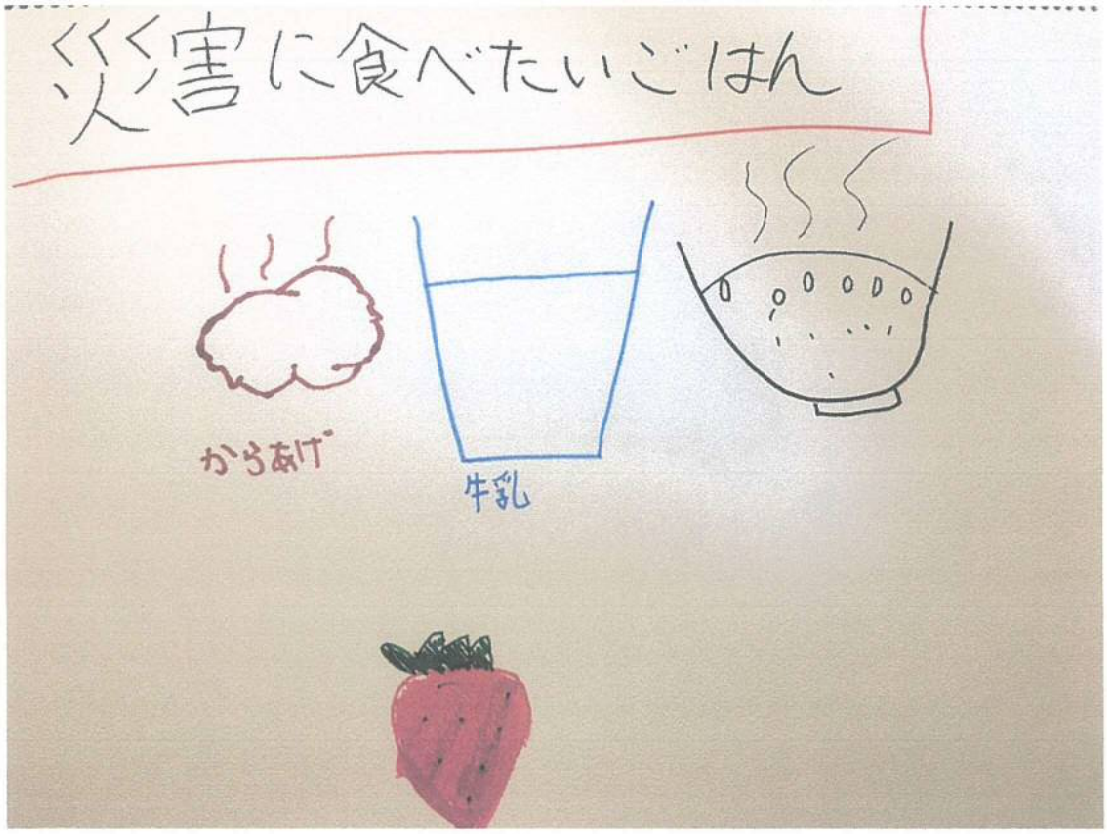
参加者 A



参加者 B

テーマ２　防災ポスターをつくろう！

これまでの話をもとに各自で防災ポスターの作成を行った。自身の災害に対するイメージや災害時に食べたいごはんなど各自の印象に残ったものをポスターで自由に表現した。



防災ポスター

（様式第８号）

上記は、「災害時に食べたいごはん」をテーマにした防災ポスターである。自身のたべたいものを絵にしており、からあげや白米には湯気を描いているように温かいごはんを食べたいと考えたことが分かる。

３．考えた防災ポスターを地域の人に紹介する

各自が考えた防災ポスターを地域の人に紹介した。子ども目線と大人目線では、防災に対する捉え方や印象が違うことが違うことを大人に伝えることを目的にしている。

発表後は、参加者で地域の防災に関するディスカッションタイムを設けた。ディスカッションでは、住んでいる地域が昔はこうで、今はこう変化しているという話や７月豪雨の際の自身の行動などに幅広いテーマで話し合いが行われていた。

２．ESD の視点を取り入れたところ、ESD の視点で見直したところ

本事業で取り入れた ESD の視点は、「質の高い教育をみんなに」と「住み続けられるまちづくりを」の２点である。

防災・減災教育とは、「学校で」「地域で」と分かれて行うのではなく、それぞれのセクターで行えることや時には学校と地域とが協同して子どもたちに伝えていく必要がある。本事業のメインターゲットである小学生は、学校の授業で災害に関する詳しいことまでは学んでいない。今回は、導入編として災害に関する基礎的な知識を伝えることを目的にワークショップを開催した。防災ポスターという形で自身の持つイメージを表現することで災害に対する誤った認識はしていないか、子どもから見た目線の災害について大人に伝える機会の提供をすることもできた。

防災・減災を考えていく中で重要なポイントであるのが「地域のことをよく理解すること」である。後半のディスカッションでは、長年住んでいる人だから知っている地域の特徴を若い世代に伝えることができた。地域の特徴を理解した上で、非常の際に「どこへ批判した方がいいのか」といった判断基準に活用することできる。また、防災・減災以外にも地域と深く関わっていくことができれば地域が抱える様々な課題解決（地域コミュニティの希薄化や団体の後継者不足等）に寄与することができるとも考えられる。

３．取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）

本事業には、小学生・大学生・留学生・地域住民の方々といった様々な世代の人が参加した。

前半では、災害の基礎的知識と共に防災食の紹介や防災リュックに入れるもの/入れたいもの、普段の生活でできる防災・減災など学校だけでは教えられない一歩踏み込んだことについても触れることができた。参加者からは、「はじめは緊張したが防災ポスターを作ったのがとても楽しかった」などの感想があった。

後半では、小学生が考えた防災ポスターの発表を通して、大人とは違う子どもならではの視点があることに気付くことができた。防災ポスター発表後のディスカッションタイムでは、留学生の災害のイメージや日本で災害にあって不安に感じたことなど「異文化理解」の要素も盛り込むことができた。大学生の中には県外出身者もおり、東日本大震災の話や岡山にきて感じた率直な思いなどを共有し合った。

（様式第８号）

本事業を通して、様々な立場、年代の人々で地域の防災・減災について考えることで他のひとがどの様に考えているのか、地域としてどの様に災害と向き合っていけばいいのかについて考えるきっかけづくりを提供できたと考える。主催者メンバーからは、１部では基礎的なことを中心に扱った内容だったので導入としてはいいが、もっと地域にフォーカスした内容にも挑戦してみたという感想があった。参加者が少数だったため時間をかけて話し合いを行うことができたのは良かったが地域の方と連携を図りもっと多くの地域住民を巻き込んでいきたいといった意見もあった。

４．今後の課題と展望

今後の課題と展望は、主に２点である。第一は、参加者の確保である。今回の事業ではチラシを近隣の学校や公民館などに配布して広報を行った。しかし、ワークショップ当日に地域の行事と重なり参加できなかったという意見もあったため今後は地域の方とも連携を図り日程調整や参加者募集を行っていきたい。

第二は、ワークショップ内容の改善である。今回のワークショップ（1 部）では、小学生を対象に１つのテーマのみで設定していた。小学生は、特に学年段階によって扱える範囲に違いが生じる。そのため、対象年齢とその対象にあったテーマを設定し、学校外で私たちだからこそできる内容開発を行っていきたいと考える。

今回ワークショップを開催した京山地区では、地区として ESD や防災に関する取り入みを熱心に行っている。しかし、「防災・減災」となるとどうしても大人が中心となってしまうことが多い。大人・子ども関係なく地域に住んでいる一人の住民として地域の防災・減災について話し合うことができるように子どもたちには防災・減災について引き続き伝え続けていく必要がある。同時に、大人側にも子どもの視点や考えを伝えていく必要もある。そうして将来的には、大人・子ども関係なく語り合えるようなワークショップを定期的に開催できるような地区を目指して来年度以降も活動を行っていきたい。